

「ドウセ此處の久右衛門も一つ穴の落だ、馬鹿々々しい、俺ア、こんな事になると知つたら代官所なぞへ行くんぢやなかつた、相尋申可儀有之に依りなんて人をベタンに懸けやがつて糞惡々しい、どうせ先きは何んどかり屈を付けての本牢送り、牢死に付き死骸取捨て位いが落ちたア、それに自體此の木ッ葉役人共の仕打ちが癪に障らあ、此間もこの半十郎さんが腹を痛めたので、俺アが代つて『旦那誠に

相濟まねーだが、病人があるでせめて白い御飯を一人前、御慈悲にあづかりどう御座へます』と此忠藏が七重の膝を八重に折つて頼んだら、どうじや、『馬鹿を申せ、其方共士百姓の分際として白い飯などは、オコの申分、たどへ病氣にも致せ、百姓が白い飯を喰ふ様では上納米の滞りも尤もじや、其方共頭分ともあらは、尙の事、以後左様な事を申さば其分には差置かんぞ』と吐しやがつた。自體其

四  
の白い御米は誰れ様が造るんじやい、誰れ様が其の白い御米を造るのだ、其の白い米を造る百姓が、白い御米を喰ふ事ならんとは、ど、ど、ど、そんな道理じや』自らの言葉に自ら興奮した忠藏は憤怒に彼れの頑丈な身體を震わせ、たが頓て其の鬼の様な眼からハラ／＼と熱涙の頬を傳ふて降るのであつた。  
『イヤ、忠藏さんの言はれる事、尤もじや』と相槌を打つたのは、同じく垢面

髪頭、頬骨の鋭い、理智に輝いた眼の所有主半十郎  
「農は國の大本なり、と云ふて百姓は國の寶じや、其百姓を苛めつけて、己れ等は二本差しの人斬り廻下、なんぞと言へばヒネクリ廻して人を嚇しくさる、聞けば此處の隠様は、江戸の上邸に、澤山の妾を置いて、日が暮れるのが惜しいと云はれる相じや、そんな事では迎も小前百姓の難は思ふても下さるまい、我等六人も活かさず殺さず、此

部屋へ投り込まれ、手も足も出ない、村方の者はさぞ我等を膺甲斐ないものと思ふて居るであらう」  
「膺甲斐ないと思はれても仕方がない、本實に手も足も出ないのだから、最う談合も仕盡した、此上は唯だ成行きに任せる外、方法もあるまい」  
と重右衛門は絶望的に言放つた。此時まで柱に脊を持たせ、兩脚を鎖のついた手で抱へながら、五人の者共の話を聞いて居た一行中の

五  
總代宗吾は居住いを直して一同に向つた  
『さて御一同、此上は何度談合したとて用は足せぬ、いつも云ふ通り、お上の方では、第一我々頭分を押し込めて、小者共を無理無態に押しつけ、遮二無二己れ等が悪政を通し、其上此度の罪を我々六名の者に負はせる爲めの、江戸お上邸から内密の御達しか、第二に我々の差出した口上書きをば當地代官所で握りつぶし、江戸お上邸へ届けぬた